

団塊のカタログ

ワシラ

トシタロー・クラフィティ

今回から昭和32年特集である。しがもワシの初心者向け映画解説つきの豪華版なのだ。

時事放談

その時々の世界情勢を、持ち前の毒舌で勝手にしゃべって人気のあった「時事放談」が始まった。時事は「最近の出来事」で放談は「思いつくままに順序なくしゃべること」もしくは「遠慮しないでしゃべること」を意味するが、看板に偽りなしの番組であった。

出演は小汀利得と細川隆元の堂々たるジジ2人、もう先がないからか遠慮しないで言うわ言うわ「問答無用」「聞く耳持たぬ」「さあ殺せ」とばかりに、保守も革新も与党も野党もなく、情け容赦なく言葉の砲弾をブツ放す。「時事放談」というよりは「ジジ砲弾」というべきで、このお二人に比べればたけしなど人の良い中年のオッサンである。

昭和22年の「公職追放」で日経新聞の社長をクビになった恨みからか、小汀利得は政府関係者には思いつきりツラくあたる。

特にお気に召さないのが文部省で、何かといえば「文部省のバカ野郎ども」と口汚なくののしる。聞いている方が恥ずかしくなる位だが、痛快であることはいうまでもない。

どうやら、送り仮名だ、読み方だ、当用漢字だ常用漢字だなどとチョコチョコいじくりまわす漢字の不当な取扱いが面白くなかったようである。というわけで、理屈と思想は小学生には難しすぎたが、それでも何とかわかったもので、このご両人の毒舌合戦は下手なマンザイなんかよりよっぽど面白くて、日曜

朝の時間帯としては「兼高かおる世界の旅」と並ぶ名物番組だった。その後、知識人が体制をけなす番組も幾つか登場したが、毒性に関しては比べようがない。ズケズケともの言う評論家はゴマンというが、どこことなくわざとらしさが目立つ。彼らはせいぜい食中毒か食あたりがいい所だが、二人はズバリ青酸カリである。水鉄砲に水爆、SLに新幹線くらい違う。両氏すでになく、あんな番組も二度と現れないだろう。残念、合掌。

長嶋と王

現役選手としてのO（王貞治）N（長嶋茂雄）が過去の遺物となって久しい。

東京六大学野球新記録の通算8本(!)のホームランを引っさげて、立教大学の長嶋茂雄が巨人軍に入団した。この年、千本ノックで有名な砂押監督が率いる立教大学はメチャクチャ強かった。サード長嶋・ショート本屋敷（阪急＝オリックス）の鉄壁の三遊間に加え投手杉浦（南海＝ダイエー）と、いずれも1年目からプロでも大活躍した選手が3人もいたのだから、それも当然だろう。

長嶋の入団発表は12月、これに先立つ4月には王貞治の投打（高校時代は投手で4番）にわたる大活躍で早稲田実業高校が春のセンバツで優勝した。2年生になったばかりの快拳で、翌33年、長嶋の後を追うがごとく巨人軍に入団、34年には天皇陛下がご覧になった対阪神戦で天覧ホームーをアベックで放ち、ON時代の幕開けを飾った。ONに匹敵する3・4番コンビは未だに現れていない。

フェリーニの「道」

ピットリオ・デ・シーカと並ぶイタリアの巨匠フェデリコ・フェリーニの代表作「道」が封切られた。少し頭が弱いけど、純真無垢な女姓ジェルソミーナを演じるのはフェリーニ（故淀川長治氏風にいえばフェルリーニ）の奥さんジュリエッタ・マシーナ、それに荒くれ男ザンパノ（アンソニー・クイン）がからむ。頑固男のガラにもない恋はすれちがいと誤解の連続が定番である。

この作品はそんな観客の期待を裏切らず、ジェルソミーナの死とザンパノの泣きくずれる姿でラスト・シーンを迎える。

これに、スリー・サンズ奏でるニーノ・ロータの切ないメロディーが劇場内に流れる。

たった3人の地味な演奏なのに、これがまた百人のオーケストラにも匹敵するような感動を与える。「甘い生活」「8 1/2」のように、難解な作品の多いフェリーニには珍しくわかりやすいラブストーリーだが、暗い結末のせいもあって、好きな作品ではない。

ザンパノ役のアンソニー・クインは、後に「ナパロンの要塞」「アラビアのロレンス」で存在感のある役を好演したし、ニーノ・ロータは「太陽がいっぱい」「ゴッド・ファーザー」でも音楽を担当、傑作を盛り上げている。やはりフェリーニ、ただ者ではない。

戦場にかける橋

捕虜は国際協定で虐待してはいけないことになっている。なぜいけないのか。

建て前としては「戦意を消失した兵士を人道的に保護する」為とされているが、本音はむしろ違う。まず、捕虜は取り引きの材料になる。敵方にも当方の捕虜がいるから、いざ交換する際には質と量がものをいう。

兵隊百人よりも将軍1人の方が価値がある

場合もあれば、時と場合によってはその逆だってあり得る。次に、勝ち戦ならともかく、負け戦で捕虜虐待の事実がバレれば、この時とばかりに仕返しされる。そもそもムキになってかかってこられたら犠牲も増える。

以上3点セットは人道の裏付けのある打算だから、双方に認識さえあればいいのだが、問題は感情が入り込んだ場合の4点目だ。

今まで殺し合ってきた憎い敵が、形勢不利と見るやあっさり降参してくるのはズルいではないか、ましてや「生きて虜囚の恥ずかしめを受くるなかれ」「撃ちてし止まむ」の教育を受けたニッポンの兵隊さんである。

捕虜になった方が悪いというので、戦略目的の鉄道建設にこき使った。それがタイとビルマ（ミャンマー）を結ぶ^{たいめい}泰緬鉄道で、最大の難関が戦場クワイ川にかける橋であったところから、このタイトルとなった。

メシもろくに食わさず、休みなしの月月火水木金金で捕虜を無理やり働かせたものだから、過労と伝染病で何万人も死亡、国際法違反ということで世界から非難された。

収容所ものの名作といえば「第17捕虜収容所」とか「大脱走」があるが、そこで描かれる収容所での捕虜は信じられないくらい権利が保障されている。これが日本の収容所では通用しない。連合軍の捕虜たちは自分たちの常識にしたがって自己の権利を主張するが、日本側は無視する。強い立場に立った日本人は、今でもそうだがコワイ。

小さい頃から親とか先生・上司など目上の人の命令に従うことに慣らされている。

親に対しての孝行、君主に対しての忠義、夫に対しての貞節も多くの場合は自ら進んでではなく、押しつけられての嫌々の渋々だ。

それが証拠には、自分が親になれば子に孝行を求める、部下を持てばムチャを言う、息子に嫁さんがくればイビる。

監督のデビッド・リーンは「逢びき」（1945年）「旅情」（55年）で代表されるような女性路線が多かったのだが、この作品では一転してスケールの大きい男性的な戦争映画に仕立てあげた。個人重視の西欧と、組織を第一に考える日本とでは水と油、双方の価値観に共通点はない。せつかく架けた橋を祖国の勝利の為に爆破するシーンの迫力は充分で、訴えたいヒューマニズムもわかるが、今いち説得力に欠け、中途半端な戦争映画に終わっている。アカデミー賞受賞作ではあるが、大したことはない。同じアカデミー賞受賞作なら「アラビアのロレンス」（62年）や「ドクトルジバゴ」（66年）の方が和紙の好み。イギリスの将校にデビッド・ニープン、憎まれ役の日本人将校が早川雪舟。

八十日間世界一周

1872年（明治5年）、飛行機すらない時代に、主人公のフォッグ氏（これもデビッド・ニープン）が八十日間で世界一周できるかのカケをるところから物語は始まる。

このへんの遊び心は英国紳士ならではで、我々には理解できない。お共は召使ただ一人で、ロンドンからパリへとフォッグ氏の世界一周旅行はスタートする。当時の主要交通機関である汽車・汽船・気球などがバリエーション豊かに登場、あわせて世界各地にロケした風景がシネスコの大型画面一杯に展開、観光気分を存分に味わえる。

出だしから手配中の銀行強盗に間違えられスコット・ランド・ヤード
ロンドン警視庁のヘボ刑事に付きまといわれるのを始めとして、行く先々でそのお国柄にあった障害が待ち構えていて、そう簡単に世界一周させてはくれない。アルプスでは雪崩、スペインでは闘牛といった具合に成り行きで物語は進行し、インドで助けた美女アウタ姫（シャーリー・マックレーン）が加わったり

もする。3人に増えた一行はバンコック・香港・横浜を経て、桑港にたどりつく。

アメリカ横断の汽車ではインディアンの襲撃にあたりしてニューヨークに到着、後はイギリス行きの定期船に乗れば良いところまでこぎつけたが、残念、出発した後だった。

むろん、こんなことで諦めるわけがなく、有り金ひっばたいてオンボロ蒸気船を買い取り、燃料切れをものともせず、ヨレヨレになりながらもなんとかイギリスに戻ってくる。

そんな一行、やれやれと思う間もなく、道中ずっとついて来たヘボ刑事にとつ捕まってしまう。疑惑がはれ、釈放されたが、1日違いで約束の期限は過ぎていた。

何しろ全財産を使い果たしているのだ。

それでもアウタ姫との結婚を決意、いざ教会へ、ふと目にした新聞の日付を見てビックリ。なんと約束の日ではないか！そうか！！

日付変更線をまたいだんだ！！

見え透いたオチが待ち受けていて、結局主人公はカケに勝つ。そして、手にしたカケ金は20,000ポンド、それは失った全財産と同額であった。この二重のオチがいかにもイギリス的で、皮肉タツプリである。

いくら物語とはいえ、男の意地がからんで全財産をかけるなど、およそ日本人には理解できない動機付けだが、西洋人の合理思想の裏にある不条理かつ大らかなユーモア感覚をそろそろ理解できても良い頃だろう。

ジャイアンツ

「エデンの東」「理由なき反抗」と並ぶジエームス・ディーン三部作の一つがジャイアンツである。共演はエリザベス・テイラーとロック・ハドソンというのも、今考えると意味深長だ。1985年（昭和60年）、自らエイズ患者であることを告白した後、亡くなったロック・ハドソン、彼の死をきっかけにエイズ

撲滅運動に力を入れているエリザベス・テイラーが共演しているからだ。

東部バージニアの娘レズリー（テイラー）がテキサスの大地主（ということは、おおむね牧場主）ビック（ハドソン）の大邸宅に嫁いでくるところから物語はスタートする。

男と女を入れ替えれば、同じテキサスが舞台の「大いなる西部」と同じ状況設定だ。
シチュエーション

ビックにはラスという男勝りの姉さんがいて、最愛の弟がひ弱な東部娘を連れてきたのが面白くない。というわけで、この東部娘の嫁さんレズリーを西部になじませるべく、良くいえば特訓、悪く言えばただのイビリが毎日のように繰り返される。このラス姉さんに可愛がられている牧童がジェット（ジェームス・ディーン）で、期待通りレズリーに横恋慕してドラマを盛り上げてくれる。

もともと悪い人じゃないラス姉さん、次第にレズリーと打ち解けてはいくが、独身の姉さんと弟の嫁さんというのは最悪の組合わせである。この姉さん、レズリーが可愛がっている馬を代りにイビリぬいたバチがあたり、この馬に振り落とされてアッサリ死ぬ。

こじゅうと
小姑から解放されたレズリーは嫁さんから奥さんへと脱皮し、やがて3人の子の母となる。一方のジェット、ラス姉さんが遺言で残してくれた猫の額ほどの土地から石油がわきだし、一躍ジャジャ馬億万長者になる。

月日は流れ、間に太平洋戦争もあった。

白髪の老人になってもなお、レズリーへの切ない想いが消え去らないジェット、孫までいるビックとレズリー、この三人の織りなす人間模様と、牧畜から石油産業へと生まれ変わるテキサスの姿を大型画面に詩情豊かに描いた作品がジャイアンツである。

原題はG I A N TでSが付かないが、これは読売ジャイアンツの影響であろう。ジャイアントでは馬場になってしまうもの。

同じテキサスが舞台の「大いなる西部」の原題THE BIG COUNTRY同様、広大な土地をイヤミっぽく売りものになっているところがいかにもアメリカらしい。

ロック・ハドソンとエリザベス・テイラーの2大スターの夫婦役も豪華だし、ジェームス・ディーン^{ひと}の遺作としての話題もあるが、3時間を超す大作の割にはあまり心を打たれない。夫婦の新婚から老年までを描いた作品としては、同じ年に封切られた日本の「喜びも悲しみも幾年月」があるが、こちらの方がはるかに感動的である。さてジェームス・ディーン。実はラスト近くにもう1シーン撮影する予定だったのだが、実生活で他人の嫁さんに横恋慕してフラれ、ヤケ酒をあおり、ヤケ・ドライブのあげくの自動車事故という最低の死に様であった。それが1955年9月30日で、ジミー24才、なにも映画を地でいかなくても良さそうなものだが、その衝撃的な死が美化して取りざたされ、これ以降、永遠の青春スターといえばジェームス・ディーンである。小森のおばちゃんのご推薦付きだもの。

確かに良い時に死んだと思う。

この作品でも相変わらず上目使いで他人を見るクラ〜い性格の役を演じているが、同じ役柄が3作も続くと鼻につく。

クランク・アップ
撮影終了寸前の軽率な行動は俳優としても社会人としても失格だし、ほとんど地でやれる役だから何とかこなせただけなのだ。

ラスト近くの重要なシーンの欠けた映画の出来が良いわけではなく、スタッフや会社に多大な迷惑が及んでいるはずだが、彼の死が話題を呼んだのは事実で、その宣伝効果を計算すれば、まあ行って来いだろう。

これからジミーをビデオで見ようと思うなら「エデンの東」だけにした方が良い。

「理由なき反抗」はただの不良映画で、ナタリー・ウッド以外に見るものはない。